

大宰府条坊跡

筑紫野市文化財調査報告書 第25集

大宰府条坊跡

第82次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第25集

大宰府条坊跡

第82次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第25集

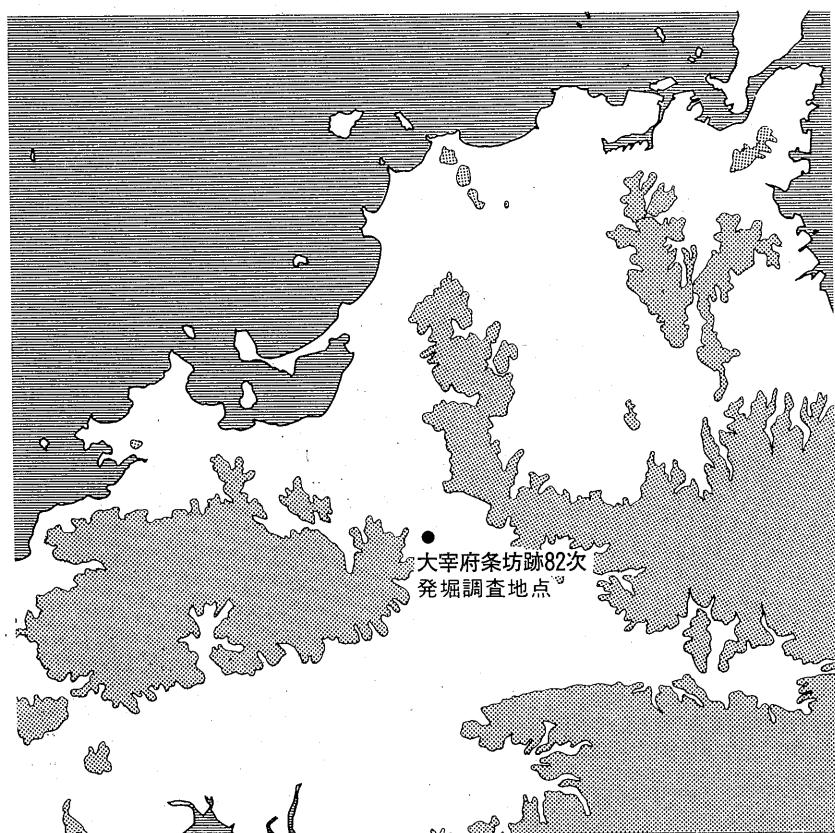
発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市 753-1

印刷 株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目 6-41

筑紫野市教育委員会

1990

筑紫野市教育委員会



序

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中央に位置します。東西から山々が迫り、その間に肥沃な平野をもつ当市は、太古から北部九州沿岸と九州の内陸部を結ぶ交通の要衝として栄えてまいりました。今日までの発掘調査でも中国製の青銅器や陶磁器などが発見され、市の北部は大宰府条坊の一部だったようです。日本で最も古い城である基肄城の一部や塔原廃寺、杉塚廃寺といった寺院跡の遺跡が点在します。また、大宰府から豊前へ通じる官道も当市を通り、近年の発掘調査では万葉集に詠まれた蘆城駅家の跡と思われるものと発見されました。このような建築まで、多種多用の工事が実施されています。今日的な人々の営みのなかで、後世に伝えて行くべき義務を負う文化財を保護するため、さらに努力を重ねる所存でございます。

最後になりましたが、今回の発掘調査にご協力いただきました方々につきまして、衷心よりお礼申し上げますと共に、今回の成果が郷土の文化財に対する関心を深める縁ともなれば幸甚に存ずる次第でございます。

平成2年3月31日

筑紫野市教育委員会

教育長 永 淵 正 敏

例 言

1. 本書は飲食店建設に伴い、筑紫野市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は筑紫野市教育委員会が、萩尾一智氏と埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、実施した。
3. 現地での発掘に係る実測・写真撮影は奥村俊久が担当した。
4. 出土遺物の実測は土器を森部順子が実測した。
5. 製図は森田くみ子が行った。

目 次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の内容	6
IV 小 結	6

挿 図 目 次

	頁
第1図 大宰府跡第82次発掘調査地点周辺遺跡分布図（縮尺1 / 20,000）	2
第2図 大宰府跡第82次発掘調査地点周辺地形図（縮尺1 / 2,500）	3
第3図 大宰府跡第82次発掘調査地点遺構配置図（縮尺1 / 100）	4
第4図 大宰府跡第82次発掘調査地点出土土器実測図（縮尺1 / 3）	7

I 調査に至る経過

筑紫野市大字塔原の萩尾一智氏から開発行為等協議届書が筑紫野市都市計画課に提出された。この協議書に基づく事前協議で、筑紫野市教育委員会は申請地が周知の遺跡である「大宰府跡」の範囲内にあることを説明した。同年5月12日、同氏より教育委員会に文化財の有無について照会がなされ、教育委員会では6月17日に試掘調査を実施した。この結果、土師器片が出土し、ピットが検出され、その旨を回答した。試掘調査結果を基に双方で協議した結果、発掘調査による記録保存措置を取ることにし、筑紫野市が発掘調査を同氏から受託することとなり、平成1年8月3日に発掘調査委託契約書を締結した。発掘作業は同年8月6日から着手した。

調査組織	総括	筑紫野市教育委員会	教育長	永渕正敏
	庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課 課長	川原孝之
			社会教育課 文化財係 係長	山野洋一
			主事	奥村俊久
発掘調査		筑紫野市教育委員会	社会教育課 文化財係 主事	奥村俊久

II 位置と環境

筑紫野市は福岡市の南19kmに位置する。東から三郡山塊、西から背振山塊が迫り、その間に福岡平野と筑紫平野とを結ぶ狭長な平野部を有す。この平野は北部九州沿岸部から九州内陸部への重要なルートで、古代から交通の要衝であった。

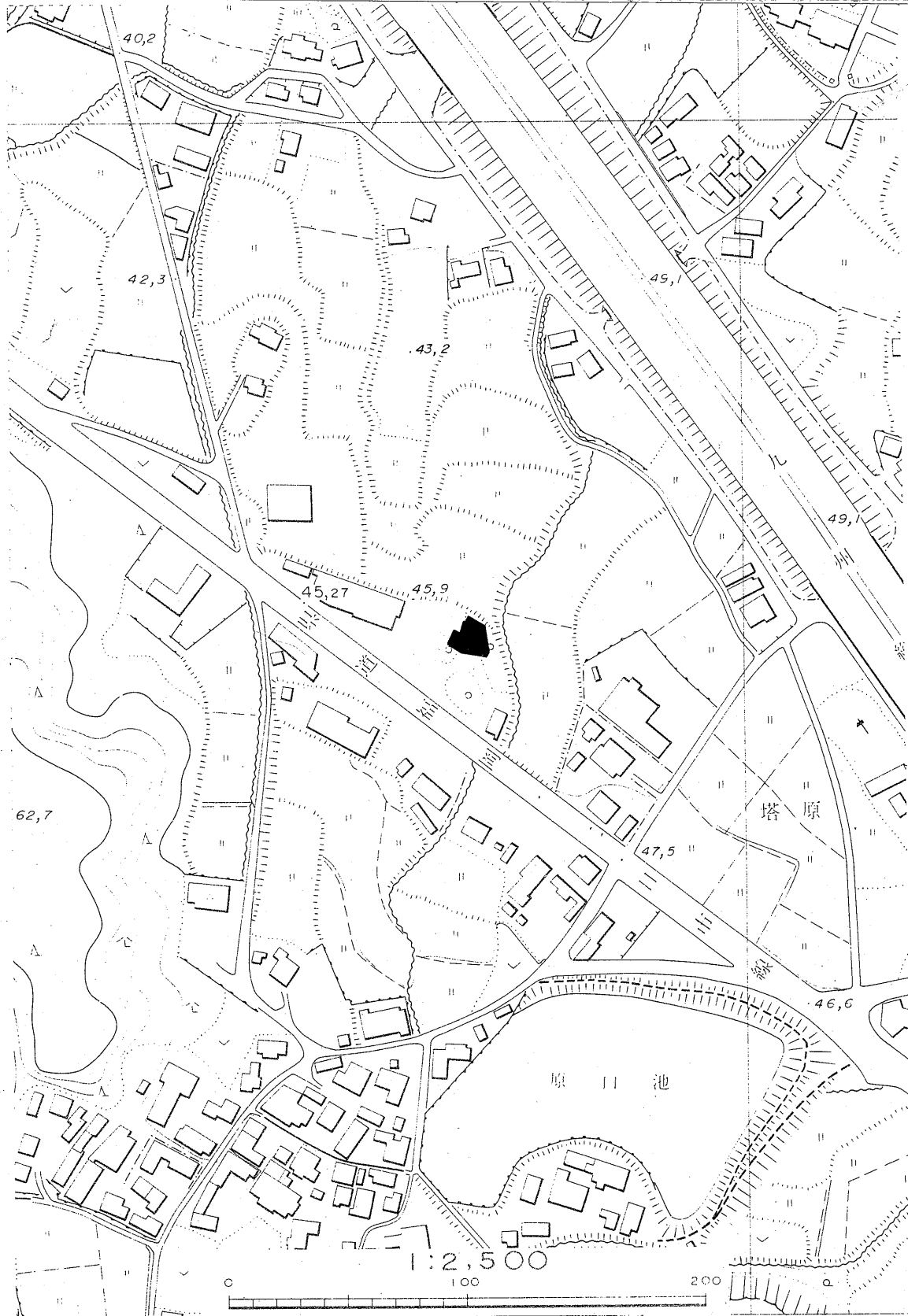
この狭い平野の北部、現在の太宰府市から筑紫野市にかけて「天下の一都会」と称された大宰府がある。今回調査した地点は、背振山塊東端の天拝山裾から延びる微高地上で、鏡山猛氏の復元案によれば右郭22条8坊に当たり、杉塚廃寺から南東400m、塔原廃寺から北西200mの所に位置する。

註

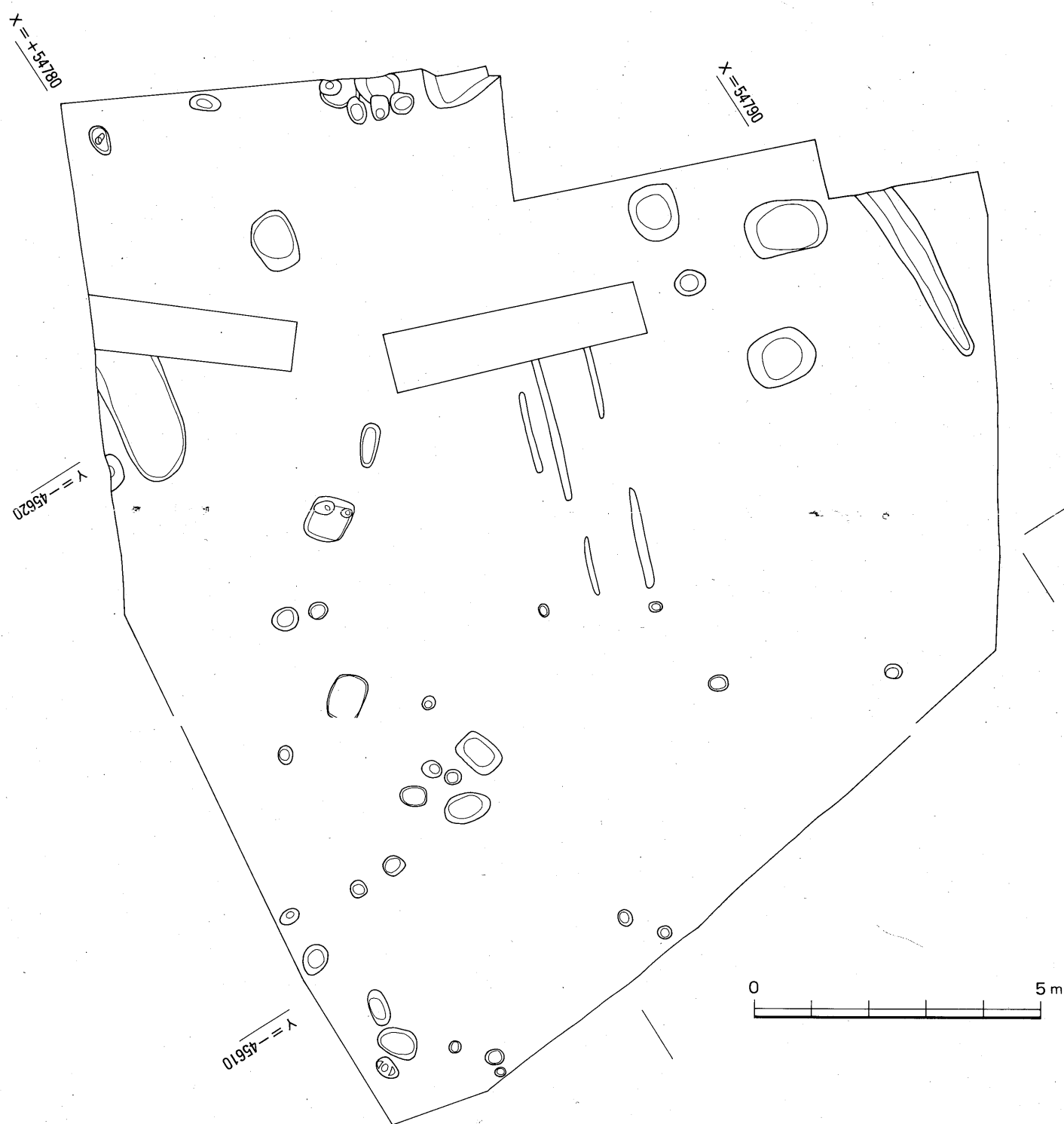
註1 「大宰府都郭の研究」 鏡山 猛 1928

註2 「杉塚廃寺」 筑紫野市文化財調査報告書第4集 筑紫野市教育委員会 1979

註3 「塔原廃寺」 福岡県文化財調査報告書第35集 福岡県教育委員会 1967



第2図 大宰府跡第82次発掘調査地点周辺地形図（縮尺 1/2,500）



第3図 遺構配置図 (縮尺1/100)

Ⅲ 調査の内容

1. 遺構(第3図/図版2)

200㎡余りを発掘調査した。遺構はピットと溝状遺構が検出され、良く締まった砂層に掘り込まれる。ピットの中には径1m余りを測り、土壌と呼んでもおかしくないものもあるが、遺物を廃棄した等の痕跡も見られず、十分に性格が明らかでないため、本報告ではピットと同一に扱うこととする。ピットは34を検出したが、個々の大きさは不揃いで、配列もまとまりがない。溝状遺構は調査区の東西で一部が観察され、座標北から3.5°東に振る。これらの遺構を切られると思われる畝状遺構が座標北から19°東に振り、調査区中央を走る。

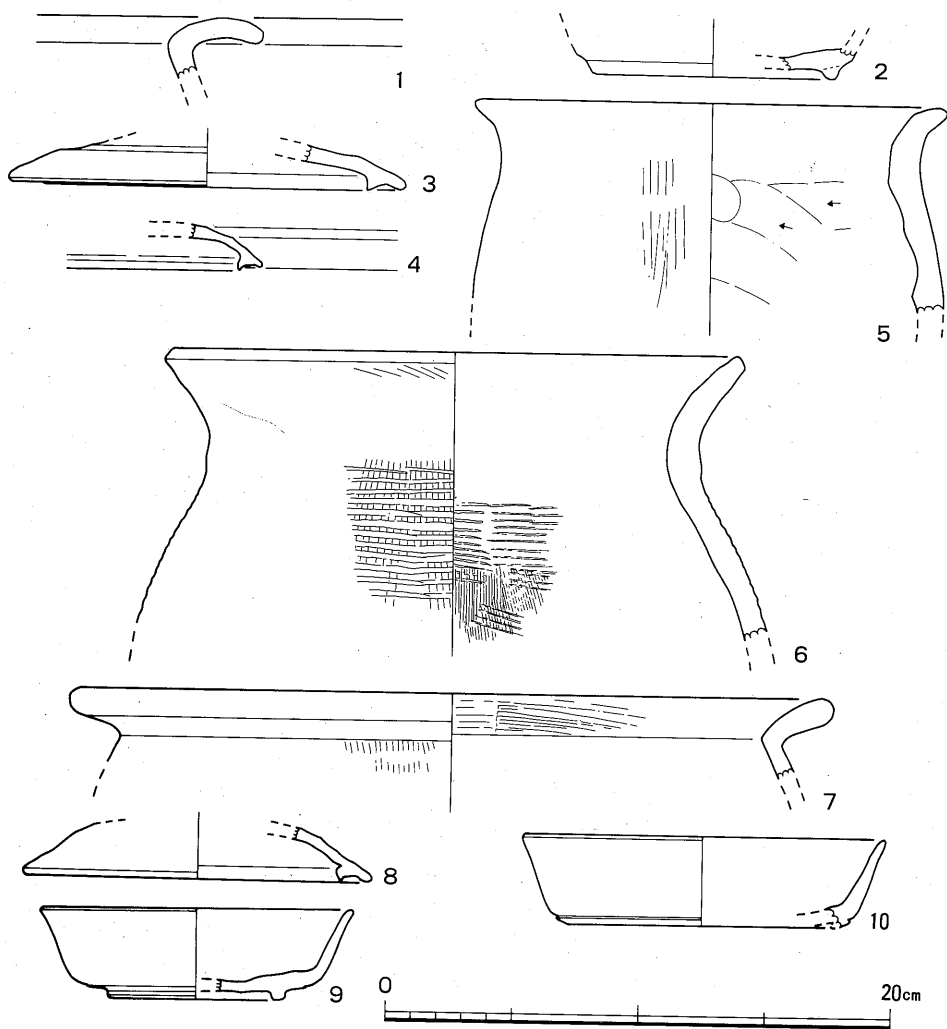
2. 出土遺物(第4図/図版4)

出土遺物は少なく、いずれも小片である。1はS3から出土した弥生式土器の甕の口縁部である。2は須恵器の坏身の底部付近で、体部と底部の境に低い高台をもつ。3～5はS7から出土した。3・4は須恵器の坏蓋で、内面に返りをもつ。5は土師器の甕で外面に煤が付着する。調整は外面を刷毛目、内面を粗いヘラケズリを施す。6はS9から出土した土師器の甕で、刷毛目の後、丁寧な叩きが施される。7～10は遺構検出時に出土したものである。7は弥生式土器の口縁部で、基本的に「逆L字状」を呈すが、口縁端部が上がり、やや「く字状」に近くなる。8は須恵器の坏蓋で、内面に返りをもつものである。9・10は須恵器の坏身で、口縁部は僅かに外反する。いずれも高台がつくが、9は体部と底部の屈曲部から1cmほど内側に、10は屈曲部付近に貼付される。

Ⅳ 小 結

今回の調査地点は、鏡山猛氏による大宰府の推定条坊では、右郭22条8坊に当たる。推定郭内の際であるが、南北に杉塚廃寺、塔原廃寺が隣接し、北東に位置する塔原遺跡では、九州縦貫自動車道の調査において、奈良時代の住居跡を始め、弥生時代から中世に至る遺構、構物が発見されている。今回の調査では、明確に性格を決定し得る遺構は発見されなかつたが、大宰府都城縁辺部の解明に、今後の周辺部の調査例を含め期待したい。

文献「Ⅱ 位置と環境」参照



第4図 出土土器実測図（縮尺1/3）



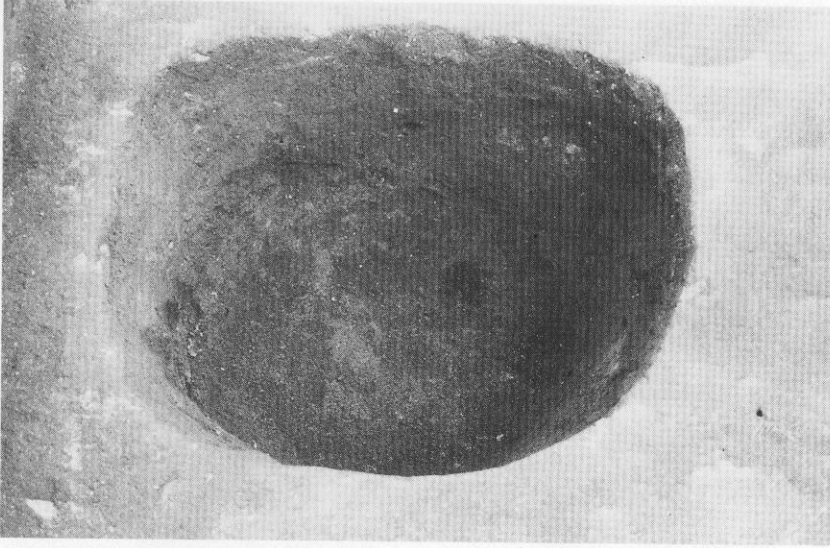
遺跡遠景（北から）



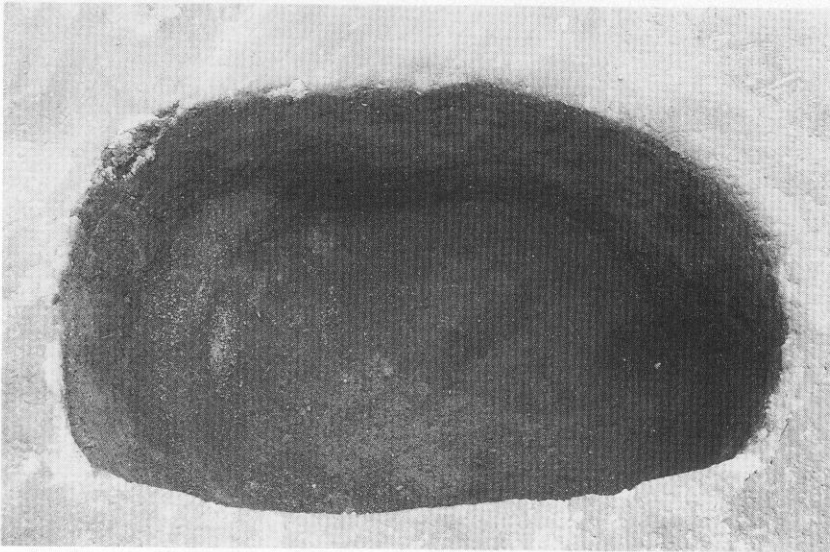
遺跡遠景（東から）



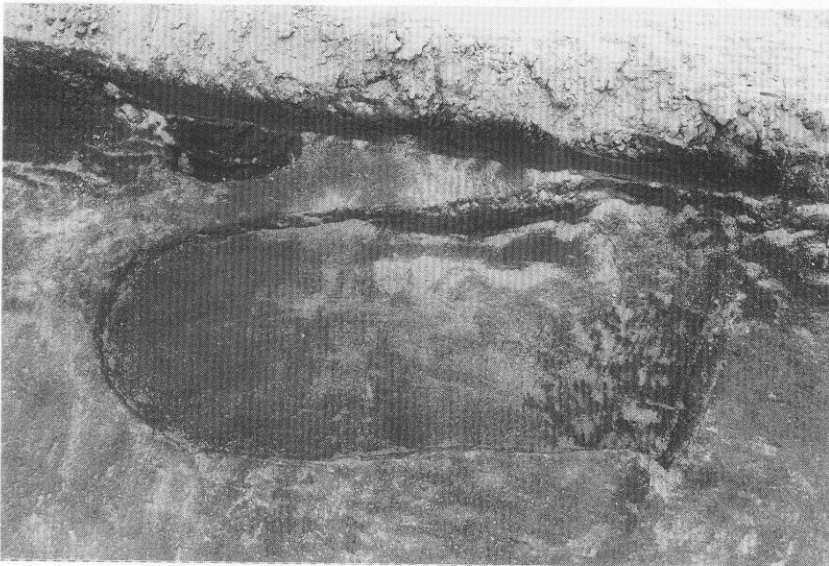
調査区全景（南から）



S 7



S 8



S 35



出土土器（番号は挿図番号に同じ）